

思うのです。

けど、だからといっていつまでも目にしないわけにはいきません。部落問題学習に取り組んでいく中で、何度も何度も目にして、少しずつ少しずつ、宣言文の中に読み込まれたたくさんの思いを感じとってもらえたらと思います。

二つめに入る前に、次の文 章^{ぶんしょう}を読んでみて下さい。

……………^{りやく}略……………私も結婚適^{てき}齡^{れい}期^きを過ぎ、実^{じつ}家^かに帰ると度々^{たびたび}結婚^{けっこん}の話題^{わだい}がでる。

そんな時、近^{きん}所^{じよ}の幼^{おきな}なじみの話題^{わだい}がでた。

親：「あそこも結婚近^{きん}いんとちがうで」

私：「へーほんま」

親：「聞^きき合^あわせに来^きよるらしいじよ」

「聞^きき合^あわせ」という言葉に私は敏^{びん}感^{かん}に反^{はん}応^{おう}した。今までにも聞^きき、当^{とう}然^{ぜん}知^ちっていた言葉であるが、なぜかその時^{とき}は、異^い常^{じょう}なほど反^{はん}応^{おう}した。

私：「うちに聞^きき合^あわせに来て、ほの人がいい人やと思うたらなんて言うん？」

親：「ほら、いい人って言うわよ」

私：「ほな悪い人やと思うたらなんて言うん？」

親：「ほら、普^ふ通^{つう}の人って言うわよ」

私：「ほんなんって変なん違うん？」

私には、誰が聞^きき合^あわせなどということをするのかはわからないが、やはり聞^きき合^あわせをする以^い上^{じょう}、疑^{うたが}いながら調^{てい}べているような気がする。その中で、「いい人」と言^いわれれば疑^{うたが}いもしないだろうが、「普^ふ通^{つう}の人」と言^いわれると、少なからず疑^{うたが}いをもつのが世^よの常^{つね}でないだろうかと思う。そうやって聞^きき合^あわせに答^{こた}える方^{ほう}は、結^{けつ}局^{きよく}その人^{じん}物^{ぶつ}を深^{ふか}く知^しりもしないで、勝^か手^てにその人^{じん}物^{ぶつ}を売^うっているのではないかと思う。

釣^つり書^{しょ}の話題^{わだい}もでた。親は言う。

親：「結婚^{けっこん}は、お互^{たが}いが不^ふ幸^{こう}にならんためにも、つりあいが大事^{だいじ}なんでよ。ほなけん釣^つり書^{しょ}はいるんでよ」

私：「家のつりあいっていったい何なんなんだ」

親：「何^{なに}を訳^{わけ}のわからんこと言^いよん、ほんなん世^せ間^{けん}一^{いつ}般^{ぱん}でいう社^{しゃ}会^{かい}通^{つう}念^{ねん}でえ」

私：「ほな、世^せ間^{けん}って何^{なに}な。世^せ間^{けん}て母^{はは}ちゃん自^じ身^{しん}でないんかだ。自^じ分^{ぶん}自^じ身^{しん}が世^せ間^{けん}てい
う盾^{たて}の後ろ^{うしろ}に隠^{かく}れとるだけでないか！」

この時^{とき}すでに、私^{はら}の腹^{はら}立^たたしは頂^{ちやう}点^{てん}を突^つき抜^ぬけ、怒^{いか}りとなっていた。この後^{のち}、こ

ういう言葉も吐き捨てられた。

「まだまだ青いな」「おまはん（同和教育に）のめりこんどん違うん」
今でもこの言葉だけは忘れられない。思い出しただけでも、腑^{はらわた}が煮えくり返るような思いになる。その場でできる限りの抵抗^{ていこう}はしたつもりであるが、しばらくして
私：「もう話とうないけん、話かけんといて」

という言葉^はを吐いてしまった。その時の実際の気持ちではあるが、後から考えれば『それを乗り越え、冷静^{れいせい}に話さねばならないのだろうな』と思う。今の私は、まだそれができないでいる。世の中にはそれを説得^{せつとく}し、乗り越え、結婚をした人が数多くいる。その人たちの苦勞^{くろう}が、今やっと偲^{しの}ばれてくる。今のままではいかんと思う。自分自身をよりいっそう鍛えていかねばと痛感する。見合いをせざるを得ない自分自身にも腹が立つし、そんな親の紹^{しょうかい}介で相手を選ばざるを得ない自分自身にも腹が立つ。

しかし、やはり親である。憎みきる事はできない。もっと若い頃^{わかいころ}は「反抗^{はんこう}して家を出て、もう帰って来ないでいようか」とも思ったが、残った末っ子^{すえこ}で、年々老いていく両親^{りやうしん}を見ると、どうしてもそれはできない。幼い時は、休日^{おきな}となれば私一人でも遊びに連れていき、遠足や運動会の時には手作りの弁当を持たせてくれた。高校の時には、足のけがで入院した私にずっと付き添い、看病^{かんびよう}をしてくれた。別に私の家だけでなくどこの家も同じで、親として当然のことかもしれないが、親の情^{じよう}というものをつくづく感じている。そんな両親をどうして放^{はな}っておけようか……。

……………略……………

拙著「いしづえ」189ページ収録

6時間目は金子先生による全体授業でした。その中で、後半かなりの時間をとって金子先生自身の生活の中に部落問題がどういうふう生きてきたかを、実体験^{じったいけん}を元に話してくれました。

結婚に反対された父母。その結婚式^{ちちがた}に父方から一人だけ出席した父の兄。父の実家に来た後の、母の辛い思い。そして、母のことを他人^{たにん}に調べられた怒り。また、その時の自分自身の差別意識……。

そんな内容であつたと思います。

そしてこの度の娘^{むすめ}さんの結婚。自らの生き方を通して、結婚とはどうあるべきかを悩み、考え、基本^き的人権^{ほんてきじんけん}を、人間としてのあり方^{かた}を自分自身に問い続け、娘を信じ、彼を信じ、二人の新しい門出^{かど}を心から祝おうとする気持ちが、私の胸^{むね}に響^{ひび}いてきました。

その授業の終わりの方で金子先生が話していた言葉を、今、活字^{かつじ}にして残しておきたい

と思います。

自分自身ふらふらしました。娘の結婚の時にはね。^{まわ}周りのみんなから言われるように「調べた方がいいのかな？」って。親として「『考えた方がいいの違う？』って娘に言うの方がええんかな？」ってぐらぐらぐらぐらしました。

けど今、^{はればれ}晴々してるんです。良かったって。私は自分に^{うそ}嘘つかんと、^{しょうじき}正直に「人間としてこうあるべきだ」という母親でおれたって、私は思うとんです。

私はもっともっと自分を母親として磨きたいし、先生として磨きたいし、みんなと人間対人間でつながる授業したいし、^{まちご}間違えた人間でありたくないって。それだけは思うとんです。

また明日から、音楽の授業の中で、もう一つ強い、ぐらぐらせんような、そんな自分を作るべく、みんなと授業の中で、音の心、音の心を求めているって、思うんです。

この時の授業について、「先生の話が長かった」といった感想があるようです。しかし、私はそれでも良かったと思っています。なぜなら、あの話は「水平社宣言」にびったり重^{かさ}なってくるからです。その重なる部分というのは「人としての誇り」です。

では、誇りうる生き方とはどういう生き方か？それは、人が人を^{いじ}虐めない生き方。人が人を^{さげす}蔑まない生き方。人が人を差別しない生き方だと思うんです。

人は、正しいと分かっているけど、なかなかそれを^{つらぬ}貫き通すことができません。しかし、それができないということは自分に^{うそ}嘘をつき、人としての誇りを一つ一つ^す捨てていくことだと思うんです。そのことを「水平社宣言」に金子先生の思いを重ね、もう1度考えてみて下さい。

そして、これらのもつ意味は、そっくりそのまま「私の目をみて！」につながってくるようにも思えます。17日に向けて、そんな見方でも学習を^{みかた}積み重ねてみてはどうでしょうか。

最後に、この授業の感想を一つだけ^{しょうかい}紹 介させてもらいたいと思います。

「水平社宣言」を学んでの感想は、はっきり言って難^{むずか}しすぎるということです。理解^{りかいりよく}力のない私には1週間や2週間でのみこめるような内容じゃないと思います。

けど、そんな私でも思うことがあります。強く思うことが……。それは部落の人たちは^{すこ}凄くひどい目にあっていたんだということです。「特殊^{とくしゅ}」と言われるほどの差別を受けてきたんだ……と、この宣言文を読んで^{とりはだ}鳥肌が^た立つくらい^{からだ}身体にゾクッとくる

それから数日後の生徒集会で「心ゆたかになれば、礼が遠くなる」と話をしたら、その日の放課後が大変でした。部活動をしている野球、ソフト、サッカー、陸上の生徒たちが私の姿を見つけては頭を下げ、見つけては頭を下げるのです。女子ソフト部の生徒たちは、ごていねいに声をそろえて「校長先生、サヨナラ」とやるのです。私の帰りを待ちかねていたかのように、茶目^{ちやめ}気^けなところをチョッピリ見せて、親愛^{しんあい}の情^{じやう}を寄せてくれるのでした。

一中生はおじぎをしないという、他校の先生方の悪^{あく}評^{ひやう}は、この頃になると消えてしまって、学校にみえる誰からも「よく挨拶^{あいさつ}のできる生徒たち」とほめていただくようになりました。「どうして、このように……」とたずねられた時、「いや別に……親しみをこめて声をかけていっただけです」と答えるほかありませんでした。

私が一人ひとりの生徒に声をかけていったのは、単に「あいさつのできる生徒」をつくることではなかったのです。いつも黒崎学級の生徒たちへの思いがありました。生徒一人ひとりと私とが共感^{きやうかん}の「絆^{きずな}」で結ばれたとき、はじめて黒崎学級のことを生徒たちに話すことができる、という思いがありました。生徒たちと私が同じ人間として、対等^{たいとう}に話し合える状^{じやう}況^{きやう}がなければ、黒崎学級の悲しみがわかってもらえる土台^{どだい}もないのです。挨拶とは人間への尊敬^{そんけい}であり、信頼^{しんらい}と愛情^{あいじやう}なのですから——。

だから、私が生徒より先に声をかけたって、おかしくはない。お互いがお互いを尊敬するから、挨拶がかわし合えるのです。

「校長先生の言うことは間違いない」と、生徒たちに信頼される日まで、私は、自らを生徒たちの前にさらしながら、自らを高めていかなばならぬと思ってきました。

(佐藤文彦著「人間の生き方と同和教育」158ページ収録)

私はサッカー一部の監督^{かんとく}をしています。毎年部員にあいさつや会釈^{えしゃく}のことについて話をします。昔はただただ「あいさつや会釈は絶対^{ぜったい}にしろ！」と言っていたと思います。しかし、同和教育をしていく中で、その言い方は変わってきました。それは、私自身の考え方が変わってきたからです。

あいさつや会釈は、どうしてするのでしょうか？それは、相手を人間として本当に尊敬できるからするものだと思うんです。もしそういう気持ちがなくてあいさつや会釈をするのなら、それは形だけの、実^みのない練習^{れんしゅう}をしているようなものです。そんな形だけの練習をするくらいなら、しない方がましです。実のない練習はかえって悪い癖^{くせ}をつけているようなものですから。「この子がいてよかった」「この子がいるから今の自分があるんだ」

では、その年の8月16日は何曜日？

3. 「堰」という漢字の中には「女」という漢字が含まれています。

さて、この漢字の作りにはどういう意味が隠されているのでしょうか？ By T氏提供



◇◇◇ これからの日程 ◇◇◇

本当は本号の冒頭に載せたかったことを、ここで書いておきたいと思います。

過日、一人の生徒が1冊の絵本を持ってきてくれました。題は「ぼくを探しに」（原題『The Missing Piece』倉橋由美子訳：講談社発行）というものです。シェル・シルヴァスタインというアメリカ人が書いた絵本です。ですから、当然部落差別について書かれたものではありません。

実は半年より少し前にも、ある卒業生がそのアーティストの書いた「おおきな木」（原題『The Giving Tree』本田錦一郎訳：篠崎書林発行）という別の本を持ってきてくれました。どちらとも、3分もあればひととおり目の通せる絵本です。しかし、これら絵本の持つ意味は大きく、子どもから大人までを充分に考えさせ、悩ませてくれるものだと思います。是非とも気軽な気持ちで手にしてもらいたいと思い、ここに紹介させてもらいました。

ちなみに、絵本の中の解説で、解説者がエーリッヒ・フロムの「愛するということ」（原題『The Art of Loving』）から次の一文を引用しています。

「愛とは第一に与えることであって、受けることではない」

せっかくの機会なので、もう一押しさせて下さい。エーリッヒ・フロムの言葉にふれた、一つの文章です。

苦しみのない愛はない

人生というステージには、思いがけず、ポツカリ穴があくことがある。小さい穴、大きい穴、病気、事業の失敗、裏切り、生別、死別、失恋。

穴があけば、勢いステージは狭くなり、それが気にかかり、不自由を強いられるそこで、穴の存在を呪うのも一つの生き方なら、穴を避け、無視して生きるのも一つの生き方だろう。しかしながら、もう一つの生き方、すなわち、その事実を素直に受け入れて穴があく前には見えなかったものを、穴があいたゆえに見ようとして生きる

ことも可能でなかろうか。

こんな話を、浅野順一^{あきのじゅんいち}著、「ヨブ記—その今日の意義^き」をもとに、大学4年生たちに話したことがあった。

それから数カ月たって一人の学生が、授業の後^{あと}話しに来了。この人は、夏休み中に婦人科系統の手^{ふじんかけいとう}術^{しゆじゆつ}を受けた結果、子どもが生めなくなるかもしれないと医者に言われたというのである。

「目の前が真っ暗になりました。というのは私には結婚^{きくこん}を約束^{やくそく}している人がいて、その人は子どもが大好きなんです。

思い切って打ち明けました。そしたらその人が、僕は『君』と結婚するので、子どもが生めるかどうかと結婚するんじゃないよって言ってくれたんです。

一時^{いちじ}は、穴があいた事でとても苦しんだけど、その穴のおかげで、相手の人の深い愛にふれることができたように思います」

その頃には、学生の目は涙^{なみだ}でいっぱいになっていた。

かわいそうに……、よくそそこまで到達^{とうたつ}してくれたと思いながら、穴の存在することに変わらないこれからの日々^{ひび}の闘^{たたか}いを思っ、心が痛むのだった。

その男の人を私は知らないけれど、多分^{たぶん}、親、兄弟、周囲の反対もあるだろうに、それも構^{かま}わないという。

これから何年^{さき}か先、いよいよ子どもが生めないことがわかって、しかも、自分の同僚^{どうりょう}たちが子どもの話をするような時に、その人に後悔^{こうかい}めいた気持ちは湧かないと言^いい切れるだろうか。

エーリッヒ・フロムが、「愛するということは、単なる強い感情ではない。それは決意であり、判断であり、約束である」と言っていることを、しみじみかみしめるのであった。

学生たちにこの「持続^{じそく}する愛」とでも呼ぶものを育ててゆきたいと思う。それは対象^{たいしょう}が持っている表面^{ひょうめん}的なすばらしさに魅^みせられておのずとほとぼしる感情ではなくて、むしろ自分の内面生活^{ないめんせいかつ}からにじみ出るようなものであり、地味^{じみ}な、時には、しぼり出すようなものではないだろうか。

苦しみのない愛はない。その苦しみを美化^{びか}することなく、味わ^{あじ}いつくす時、苦しみをさえ愛することができるようになるのだ。



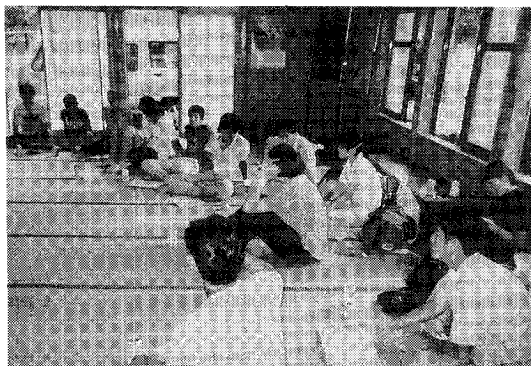
- ★10月14日(土) 部落解放中学生学習交流会(1:30～板野町総合センター)
- ★10月17日(火) 2年B組全校全体学習(第2回板野中学校同和教育研究会)「私の目をて！」
- ☆10月20日(金)～22日(日) 板野郡秋季新人体育大会
- ☆10月26日(木)・27日(金) 2学期中間テスト
- ★10月31日(火) 板野郡同和教育研究会(上板中学校)
- ★11月1日(水) 板野町同和教育研究会(板野南小学校)
- ★11月2日(木) 3年C組3年全体学習



全国部落解放高校生奨学生集会
(8月3日：高知県)



3年第3回全体学習(10月5日)



学習会一泊研修
(8月8日：あいあいランド)